

福井支部ニュース

2026年度 第4号

日本科学者会議福井支部

連絡先: 山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆報告 2026年度 JSA 福井支部第5回幹事会の概要 (山根 清志)
- ◆図書紹介 『詩集 脳を扱う』川村信治詩集 (寺岡 英男)
- ◆書評 『世界政治 1~5』岩崎正洋／松尾秀哉編 その1 (小野 一)

【報告】2026年度 JSA 福井支部第5回幹事会の概要

2026年9月14日(月)18:00過ぎから、オンラインで定例の第5回幹事会が開催された。山本事務局長の司会により、事前に配布済みの議題案にそって議事がすすめられた。

1、『福井の科学者』第143号(能登半島地震特集号)について

(1) 普及状況について

・伊藤幹事によれば、トータルで何部売れているか正確には把握できていないが出だしはよいとの報告。pdf版の件も話題になった。

(2) 活用方法について

・特集号を使用して例会をやるか、或いは合評会形式というのもあり得るのではないかと。結果、さしあたりハイブリッドでの「オンライン合評会」でいくということとなり、については寄稿してくれた丸岡、大豊両氏には是非参加してもらいたく、それが可能となるよう条件を整える。山本雅、小野、森の三氏で相談して進めることとなった。

2、JSA 第57回定期大会について

(1) JSA 国際活動のあり方について、(2) 福井支部として全国事務局へ伝える内容について、(3) 第26総学G2分科会の竹内智事務局長の報告について(小野一幹事提案)、は、引き続き幹事会メールで今後も議論していくことになった。

3、例会について(積み残し事案と継続事案)

(1) 積み残しとなっている企画

①樋口英明元裁判官と映画『原発をとめた裁判長』

②島崎邦彦著『3.11 大津波の対策を邪魔した男たち』をテーマとする例会
これらについては、進展無し。

(2) 平和問題をテーマとする例会

戸聡幹事への講演依頼の具体化 11/7(土)、11/21(土)のいずれかで例会設定。

(3) 『日本の科学者』2026年7月号の活用

『日本の科学者』2026年7月号「原発の危険性と放射線被ばくの実態」について、事務局長の意向としては来年(来年早々)の課題としたいとのこと。

(4) その他

『福井の科学者』第143号(能登半島地震特集号)「オンライン合評会」を計画する。

4、「山本富士夫先生を偲ぶ」追悼集について

8/28(金)、追悼集作成実行委員会を開き、以下を確認した、との報告。

- ・添付のpdf(初稿・A5版を修正したもの)について、3団体で確認した後、印刷する。
- ・伊藤幹事の尽力により、ホープ印刷から送られてきた見積もりでは、税込み ¥96,800/200部、とのこと。

5、支部ニュースについて

8月30日付で支部ニュース第3号が発行された。

6、会員拡大と会計について

(1) 会員拡大

・会員拡大パンフレットのたたき台づくりに関しては、担当スジよれば未だ手がついていないとのこと。

(2) 会計

・伊藤会計担当幹事から残高額が示され、未だ余裕があるとのこと。

7、全国事務局からの問題提起（事務局ニュース第 62 期第 4 号より）

- ① JSA の財政危機と、会費・会誌発送制度の大幅な見直し（全国支部事務局長会議）
- ② 全国の支部活動調査——福井支部の今後を考える上で重要
- ③ 会員減少が依然として深刻——2026 年度だけで 37 人減
- ④ 日本学術会議——会員選考に「安全保障」を持ち込む問題
- ⑤ 科学技術予算と軍事研究——2027 年度概算要求が 11 兆円へ急増
いずれも大問題ばかりであるが、既に時間を消費してしまい、議論できなかった。

8、イベント紹介とその他 については省略。

次回 10/5(月) 第 6 回幹事会を確認、定刻 20:00 前に終了。参加幹事は 8 名。
(山根 清志)

【図書紹介】 『詩集 脳を扱う』 川村信治詩集 能登印刷出版部 2026/7/30(発売日)

支部会員の川村さんが新しく『詩集 脳を扱う』（2026 能登印刷出版部）を出した。

私は川村さんとは、勝山市の中学校再編計画反対運動の講演で一度呼ばただけの関係で、ましてや詩などまったくの門外漢で素養もない。しかし、この詩集やこれまで出された川村さんの詩集を読めることで、著者のきわめて真摯な生きざまを知ることができた。このような図書紹介という機会をいただき、感謝したい。

『詩集 脳を扱う』は、題名にある通り、脳に関わる詩が多く収められている。他には、私の勝手な区分では、平穏で謹直な生活やそこでの人との交流、そしてそうした大切な日常・生活を奪うことへの「やむなき非同意」が収められている。この詩集の構成は、これまでの著者の詩集と併せ比べると

ユニークである。著者はそのことを「あとがき」でこう述べている。

「わたしは既著『こよみ』のような詩を始めるに到ったときに同時にこの『脳を扱う』のような詩を始めるにいたりました。それから二つを並行して書いてきました。」

『こよみ』2022 とそれに続く『こよみ その2』2024 は、本詩集『脳を扱う』でも少し収められている、「平穏で謹直な生活やそこでの人との交流」と重なるもので、地元勝山での変わらぬ生活と豊かな自然が詠まれ、私も共感をもって読んだ。本詩集では、さらに、そうした生活・世界を奪うことへの抵抗が示される。しかしそれは、『幸福の擁護』2016 に収められたような、特に東日本大震災以降に多く見られる安全保障、原子力発電、憲法などをどちらかといえば直截に表現した詩とは異なる。本詩集では「脳」に関わる詩が多い。しかも、著者の揺れながらの模索を感じるのは私だけだろうか？あたかも天動説での惑星の動きの順行と逆行のように。例えば、初めの方に収められた「抽象をきわめて」「具体をこぼして」では、それぞれ

「抽象をきわめれば生も自然もない／あたらしい未来はない」「具体だけでもなんと多すぎて／遠くのものや過去や未来の物事にも生きようとして／具体をうしなっていく」と詩っていて読者をも惑わせる。しかし、終わりの方に収められた例えば「Algebra」では、「悩みも苦しみも間違いも／関係によって解かれるけれど／問題の度合いに応じて／その関係はつながりの深さを必要とする／解かれることがわたしを修復するけれど／その前提として一度解体される必要があるという」という。初めの方に収められた先の思考の揺れも、その解体と修復のプロセスだったのか。同じく終わりの方の「俯瞰」では、「俯瞰は喜び…／ときに脳はそれらを結び新たな意味へ統合する／創造や工作や運動や制度のようにその



とき脳は俯瞰して連携をはかるので／俯瞰はその扱いのある者において鍛えられ鍛えられてこそ用意されよう」と展望と自覚が示されている。本詩集では、著者自身の揺れながらの模索の生きざま trajectory が語られている。

本詩集の紹介ということでは、以下のことにも触れておかなければならない。著者は先の『幸福の擁護』の「あとがき」で次のように書いている。

「前詩集（「誕生日の詩集」2002：引用者注）を出してから14年になります。この14年間、他の形式の詩を作らなかったわけではないのですが、四行四連という形式を主に使ってきました。そのなかから選びました。人もまた生れて死ぬという形式の中にいます。古来言われるように、形式は束縛でありながらそのなかでもたらされる自由があり、定常によって可能になる節約もあります。あるいは、形式によってひびきあう人の脳のリズムや波動のイメージの容易さというものもあるでしょう。ただ、この形式を始めた初期からわたしには、これらの詩をまとめて本に編むことなしにはこの形式から出ていけない、というとらわれがありました。こうして、ようやくわたしは、この形式に対して自由になれるでしょう。」

本詩集はこの四行四連の形式を採っている。他方、並行して書かれている『こよみ』や『こよみ その2』はその形式から自由になっている。本詩集は形式のうちにある「脳」を扱っているからなのだろうか。この辺りも興味深い。

本詩集ばかりでなく、その前に書かれたいくつかの詩集も併せ読むことをお勧めしたい。

（寺岡 英男）

【書評】 『世界政治 1～5』 岩崎正洋/松尾秀哉編 その1

ちくま新書 2026/4～2026/8

第1巻「民主化と権威主義化」 第2巻「紛争・戦争・政治的暴力」を中心に

2026年に刊行されたちくま新書『世界政治』全5巻シリーズ。私も政治学者の端くれだが、これは時代が求める画期的企画である。まず、各巻の副題（サブタイトル）をみておこう。第1巻が「民主化と権威主義化」、第2巻が「紛争・戦争・政治的暴力」、第3巻が「政党政治のゆくえ」、第4巻

が「大統領制と議院内閣制」、第5巻が「新たな政治の課題」である。各巻とも10の章と6本のコラム記事から構成される。本欄では、3回に分けて書評を掲載する。

政治学にもいろいろな分野があるが、本シリーズが採用するのは比較政治という手法である。従来、政治学研究は西欧諸国を主たる分析対象としてなされてきたが、それでは説明のつかない事象はいくつもある。世界に視野を広げ、あるいは自分たちの「当たり前」を相対化できることが、比較研究の醍醐味である。シリーズでは、あまりなじみのなかった国が登場したり、同じ対象に視点を変えて繰り返し言及されたりする。各巻の副題が示すのは分析方法の問題であり、それがいわばタテ糸をなす。そこにヨコ糸としての各国比較が絡まり、世界政治の新たなイメージが浮かび上がる。

全体構成をふまえた上で、第1巻「民主化と権威主義化」から読み進めていこう。紆余曲折はあるものの、20世紀後半は民主主義の時代だった。だが今なお、独裁ないしは権威主義的政権は世界各地に残存し、いやそれどころか、民主主義を自称する国の権威主義化さえ起こっている。民主化の挫折とその反作用としての権威主義こそが、21世紀の現実なのである。第1章を執筆した杉浦功一は、民主主義の後退の特徴を3点挙げる（31～33頁）。

第一に、司法や議会のチェック機能が制約され、法の支配が侵害され、執政府の権力が拡大していく傾向。第二に、政権に忠誠的な裁判官の任命、NGOを規制する法律の導入、大統領の多選を可能にする憲法改正など、政権による民主主義の「浸食」。これは、暴力をむき出しにし



た独裁政権は今日ではまれで、むしろポピュリズムによる民主主義の空洞化こそが脅威、という知見とも呼応する。そして第三に、「市民（社会）スペース」における制限の拡大である。

米国トランプ大統領の登場が民主主義劣化の象徴であることは、言を俟たない。政治家の適性を欠く人物が、共和党を乗っ取り、経済格差拡大や政治的分極化に乗じるかたちで、フォーマルな制度機構の頂点に登りつめ、大暴走してしまった。第2章執筆者の梅川葉菜は、超富裕層優遇の経済政策と排外主義的動員とが結びついた統治様式を言い表す「プルートクラティック・ポピュリズム」との用語法を紹介する（54頁）。第一次トランプ政権が任命した保守派の最高裁判事の影響下で、連邦裁判所のドブス判決（2022年）は、人工妊娠中絶に関する半世紀来の合衆国憲法上の権利を覆した（この件は第3巻や第5巻でも言及される）。梅川によれば、これも、過大代表された政党が司法を通じて政策を転換し得ることを示す好例なのだという。国際刑事裁判所（ICC）への攻撃には（原稿締切に間に合わなかったため）言及はない。

それとともに注目されるのが、ロシアのプーチン大統領である。彼が権力を掌握し、憲法「改正」により大統領任期を長期化する手法にはロシア固有の事情もあるが、第3章を書いた溝口修平は、世界各地で進行する政権の「個人化」に注目し、現代は政治体制を問わず強い指導者が存在感を増す「新たな独裁者の時代」なのだという。プーチンは、2012年の大統領復帰以後、支持獲得のために伝統的価値観や道徳に訴える傾向を強めた。こうした「保守的転回」は対外的には反欧米主義と結びつき、ロシアは国際舞台で自国の国益を強く訴えるようになった（88頁）。2022年の戦争勃発に至る一連の対ウクライナ政策はこの文脈で理解されるべきだが、ウクライナの側の事情の分析は第2巻の第2章（執筆者は松寄英也）でなされる。

第2巻の「紛争・戦争・政治的暴力」という副題は、様式化された制度を通じた統治行為という「お上品」な政治を念頭に置く人なら仰天しそうなタイトルである。そして、紛争多発地帯が非西欧世界に多いことから、本巻には私たちがよく知らない情報が多く含まれる。

「知らない」以上に危険なのが、知ってるつもりで実は知らないこと、生半可な知識や思い込みが判断を誤らせることかもしれない。その意味で、第

2巻の冒頭に中東地域の紛争を扱う章（執筆は末近浩太）が置かれるのは示唆的である。末近は、中東を「国家の弱さ、経済的脆弱性、外部介入といった普遍的要因が重層的に作用しやすい地域」として理解する視点を示した上で、2023年10月に始まったガザ戦争（武装組織ハマス掃討を掲げたイスラエルの介入だが、行き過ぎた戦闘は国際的批判を浴びた）を例に中東紛争が終わりにくい理由を説明する。「ガザ戦争が終わりにくいのは、どちらかに紛争を終わらせる意思が欠けているからだけではない。勝ち切ることも、完全に負けることもできない状況が長く続き、決着がつかないかたちで紛争が固定されてきた。その構造こそが、暴力を繰り返し生み出してきた最大の要因なのである」（44～45頁）。そこには、ともすれば陥りがちな「どちらが正しいのか、悪いのか」という二元論思考への反省がある。

内政不干渉は国際法上の大原則だが、放っておいては内戦や人権抑圧が止まない破綻国家もある。そうした地域への人道的介入は、実は大国の侵略的野望の隠れ蓑のことが多いとしても、真剣に考えられるべきテーマである。介入はどこまで正当化され、ほんとうに平和や民主化に寄与するのだろうか。第4章（イラク戦争）、第7章（シリア）、第8章（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）をはじめ、考える材料は各章にある。もちろん、パレスチナ問題については（上述の第1章とあわせ）第5章も参照。デジタル技術が戦争をどのように変えるかという現代的テーマを扱った第3章にも注目。

（小野 一）

=====

＜＜編集後記＞＞

2026年度支部ニュース第4号をお届けします。

国連総会の一般講演が9/22から始まりましたが、トランプ米大統領の長時間にわたる演説で世界が震撼しています。イランを「ならず者国家」と呼び「平和のために武力で壊滅させる」と公言しました。さらに、「ICCはならず者機関」として各国に脱退を要求し、解体すべきだ、と主張しました。これに多くの国々の代表が批判的に言及しましたが、ICCの長官赤根智子所長を送りだしている日本の高市発言が異様でした。「昭和100年記念式典」では「天皇を無視」し名古屋の「アジア競技大会開会式」は「天皇に任せ」て国連総会に臨んだ高市首相の演説は、トランプ氏への「ゴマすり」発言はともかく、「ICCを一貫して支持している」とのみ強調し、ICC解体や赤根所長への経済制裁などには触れずスルーしたのです。これには唖然としてしまいました。

（OG.）